The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	海外フィールドスタディ（FS）の運営
Author(s)	敦賀，和外；本庄，かおり；安藤，由香里 他
Citation	GLOCOLブックレット. 2016, 18, p. 112-118
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/55577
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

4-3
海外フィールドスタディ（FS）の運営

敦賀和外・本庄かおり・安藤由香里・片山 歩

1. プログラムの科目化

GLOCOLで実施する海外FSは一部を除いて、単位を付与する授業科目として提供しています。海外体験学習の科目化は、GLOCOLで実施する海外FSを「大学において実施する海外体験学習による教育」として位置づけるという意味において重要でした。具体的には、授業科目化により後に述べるシラバスへの学習目標の設定や評価方法の記載が必要となり、GLOCOLが実施する海外FSの実施の意義、教育目標、期待される教育効果の明確化が図られました。

一方で、授業科目化をすることの難しさも経験しました。例えば、授業を科目化することで履修登録が必要となりますが、各学部・研究科の履修登録期間内に参加学生を募集・選考する時間を確保することができませんでした。そこでGLOCOLのプログラムでは、あらかじめ各学部・研究科の教務係と打ち合わせのうえ、通常の履修登録期間以後にプログラムに参加を希望する学生の当該科目履修登録をGLOCOL事務職員が実施することで募集期間を1ヵ月確保する方法をとりました。そのため、他の科目には設定されている履修取り消し期間の設定をなくしました。

また、海外実習の実施時期も問題となり、他の授業や試験期間といった参加学生の都合を考慮すると、海外実習は夏季休暇、春季休暇とせざるを得ませんでした。しかし、協力先機関の都合や各学部・研究科の成績登録締切日の都合により、プログラムに参加できなくなる（履修できなくなる）学生も出てきました。特に、成績登録締切の早い最終学年の学生が参加できないケースも生じました。

研究科によっては、教育課程上、大学院学生は学部学生も履修できる科目の履修ができないなど、プログラムの内容が学生に適切なものであっても、教育課程上不可とせざる得ない場合もありました。全学を対象とする科目設定を行う場合には、各学部・研究科の履修要件を考慮したうえで、組み立てていく必要があります。

2. 科目の構成

授業科目化されたGLOCOLの海外FSでは、事前学習、現地実習、事後学習からなる一連のプロセスを通して学ぶこととしました。事前学習では、渡航する地域に関する基本情報を学び、対象地域の地理、歴史、社会制度、文化等の背景を確認します。その上で、プログラムごとに設定されたテーマに関する専門的な講義を受講するなどの準備をし、個人の研究目標や活動計画をそれぞれの興味や専門性に基づき設定します。事前学習では、フィールド調査における研究倫理や海外で起こりうるリスクについて学ぶ機会も設けました。体験学習プログラム実施後は、実習で得た知見や経験を振り返りながら報告書を作成し、報告会において発表するという作業を課しました。事後の学習を通じて、現地での学習を深めさらに将来に目を向ける機会とすることが期待されています。

授業科目として実施した海外FSについては、学習の評価（採点）を実施する必要があります。採点は、同科目で実施されるプログラムの採点を標準化するために導入した学習採点シートにより、各プログラム担当者が実施しました。本評価シート作成においては、当初に設定した学習目標をより具体的な項目に落とし込み、その上で評価の細目を設定しました。

3. シラバス／募集要項の作成

授業科目化により授業の目的と概要、学習到達目標、成績評価の基準等を明確にし、シラバスに記載する必要がありました。学習到達目標は学生の所属する教育課程（学部、博士前期、博士後期）により異なるものを設置し、同一プログラムであっても教育課程の異なる学生を受け入れることが可能となりました。また、同一課程においてはどのFSに参加しても同様の目標に到達することを想定し、同じ教育課程中に複数回履修することを不可としました。これは、単に海外渡航したい学生が学習目的から逸脱して、繰り返し海外FSに参加することを防止するためです。

付与する単位数は、「海外フィールドスタディ(A)」「海外フィールドスタディ(B)」では事前学習（90分×7コマ及び必要に応じて追加）、現地実習（10日～2週間程度）、事後学習を行うことで2単位としました。

また、シラバスと同時に公開する募集要項には、参加費や助成額、プ

ログラムの定員を記載しました。参加費はプログラムの渡航先によって大きく異なりますが、参加費は自己負担することを原則として、渡航費の一部を助成する仕組みとしました。助成金は、日本学生支援機構（JASSO）海外留学支援制度や大阪大学未来基金の海外研修プログラム助成金等を活用して運用しました。金額はJASSO海外留学支援制度の地域別支給額に準じて決定しましたが、国費留学生の場合は留学期間中に支給される給与以外の奨学金を受給することができないため[3]、受給が認められる交通費実費を、助成額を上限として支給しました。

プログラムの定員は、渡航先や活動内容によって決定しましたが、リスク管理セミナーなどでは、一般的に引率教員1名の目が届く参加者数は6-7名という意見が多かったです（GLOCOLでは原則、2名の引率教員体制をとりました）。

4. 選抜方法

海外FSでは、書類審査と面接により参加者を選抜しました。応募申請書には志望動機、自己の学習目標、自己の研究分野との関連性、自己の目指すキャリアや将来像との関連性、語学能力について記載させました。語学能力については、資格試験点数のみによる選考は行いませんでしたが、プログラムの内容に応じて、活動参加に支障の無いことを確認しました。

5. スケジュール

GLOCOLの年間の動きをまとめると図1のようになります。

大まかな段取りとしては、①プログラムの企画・立案、②予算編成、③参加者募集・選考、④渡航手続き、⑤事前学習、⑥現地実習、⑦事後学習、⑧経費処理があります。実施する前年度の9月頃から、翌年度実施するプログラムの企画を考え始め、年度末にかけて予算を編成します。そして夏季休暇に行うプログラム（前期授業分）については、4月に募集を始め、5月上旬には参加者決定、6月から事前学習や渡航手続きを並行して進め、8-9月の海外実習に臨むことになります。そして夏季の実習が始まる頃には、春季休暇に行うプログラム（後期授業分）の募集準備を進めます。帰国後には事後学習と経費処理を行います。経費処理では、学生に対しては助成金の支払い手続きを行いますが、必要な書類は助成金の財源によって異なるため、必要な書類について渡航前に案内をしておくと比較的事後処理がスムーズです。もう一つの経費処理は、現地経費の支払いです。本来であれば請求書による支払いが望ましいのですが、外国送金が困難であったり、またその場で現金で支払わなければならない場合も多くあるため、車輌代、会場費、情報交換会費、通訳謝金、講師謝金等、引率教員が現地で立て替えた費用の立替清算処理を行うこととなります。必要な書類について予め確認し、証拠書類などの持ち帰りが必要な書類や情報については渡航前に引率教員に伝えておく段取りが必要です。なおプログラムの形態[4]によっては、協力先のNGO等や旅行会社と役務契約を結び、経費処理を行う場合もありました。しかし、大学が主催するプログラムで教員個人が立替をするのは望ましいことではありません。今後海外でのプログラムを増加させるのであれば、経費処理の方法についても、他の公的機関の処理方法も参照しながら再考することが必要だと思います。

次に2012年9月にスイスとフランスで実施した「国際機関の活動を知る」

3　文部科学省 国費外国人留学生制度実施要項　http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1266486.htm　（2015年11月16日最終閲覧）

図1：海外FS実施の年間スケジュール

前期プログラム			後期プログラム	
実施前年度	9月～2月中	①プログラムの企画・立案		
	～4月上旬	②予算編成		
実施年度	3月末～5月中旬	③参加者募集・選考		
	5月末～	④渡航手続き		
	6月～	⑤事前学習		
	8～9月	⑥現地実習	③参加者募集・選考	9月末～11月中旬
	帰国後	⑦事後学習	④渡航手続き	11月末～
		⑧経費処理	⑤事前学習	11月末～
			⑥現地実習	2月
			⑦事後学習	帰国後
			⑧経費処理	

次年度 JASSO海外留学支援制度募集
シラバス入力
履修登録
成績入力

4　GLOCOLの海外FSには主に1）教員が企画立案、2）教員が発案、NGO等と一緒に企画、3）教員が企画主旨を伝え、旅行業者が立案の3つの形態がみられた。

を事例に、プログラムの実施過程を説明していきます。「国際機関の活動を知る」は、理系から文系まで専門性を活かし得る様々な国際機関が集中し、その活動を知る上で格好のロケーションであるスイスとフランスを訪問地として企画しました。ジュネーヴ、パリ、ストラスブールの12機関を訪問し、国際機関の活動を直に見聞し、その活動を知り、自らの研究に役立て、将来、国際機関で長期ISをするための情報収集を行うことを目的としました。

6. 事前学習で何を教えるか？

訪問する機関が決まった時点で、機関ごとにリーダー及び副リーダーを決めました。リーダーが国際機関の専門家の前で自らの関心のあるテーマについて報告し、副リーダーが議事録を担当しました。また、リーダー及び副リーダー以外にも関心のある者が集まって勉強会を行うサブグループを組織しました。学生たちが、授業の空き時間等を上手く利用し、サブグループが自主的に集まって討論するような活動を行うことを期待していたのですが、残念ながらこの仕組みはうまくいきませんでした。その最大の原因は、リーダーとして担当する機関だけで手いっぱいで、他の機関の学習まで手が回らなかったからだと思います。

リーダーがグループメンバーをまとめるしくみが上手く機能しないことが事前学習中に明らかとなった時点で、引率教員間で改善策の検討を行いました。一つの改善策として各国際機関で報告や議論を行うための「共通テーマ」を設定することを考えましたが、最終的にはこの案を採用するには至りませんでした。その理由は、各国際機関の設立目的や果たす役割は多種多様であり、当初から共通テーマに沿って訪問機関を定める方法であれば可能であったかもしれませんが、訪問機関が定まってから機関間の共通性を見出すのは困難だったからです。

事前学習では総合大学としての大阪大学の特長を最大限活用しました。学生が各国際機関の専門家の前で行うプレゼンテーションについて、多様な専門も持つ教員にコメントを依頼し、メールや出発前のプレ報告会でアドバイスをいただきました。この大阪大学の教員への協力依頼も、各学生に任せました。

7. 実習中は何に気を配るのか？

海外実習では、その日の実習内容を「振り返りシート」を用いて、毎日

表1：「国際機関の活動を知る」事前学習を含む全体の流れ

5月28日(月)	9:00-10:30／14:00-15:30	初顔合わせ、航空券予約等
6月21日(木)	8:30-10:00	リスク管理特別ワークショップ(3名)
7月4日(水)	18:40-20:10	リスク管理ワークショップ(7名)
6月26日(火)－7月13日(金)		リーダー個人面談(30分)
7月29日(日)		第1回事前学習：プレゼンの方向性を全員にシェア(訪問機関の現在の重点分野、抱えている問題点を把握したうえで、どこにポイントを置くか)
	10:00-10:30	連絡事項
	10:30-11:30	国際機関の概要
	11:40-12:40	国際ベンチャービジネスの概要
	12:40-13:40	ランチ休憩
	13:40-14:40	機関①②③④⑤(各10分)
	14:50-15:50	機関⑥⑦⑧⑨⑩
	15:50-16:00	ラップアップ
9月2日(日)		第2回事前学習：進捗状況報告
	10:00-10:20	連絡事項
	10:20-11:20	機関①②③(各20分)
	11:30-12:30	機関④⑤⑥
	12:30-13:30	ランチ休憩
	13:30-14:50	機関⑦⑧⑨⑩
	15:00-15:50	改善へのアドバイス
	15:50-16:00	ラップアップ
9月6日(木)		第3回事前学習：本番通りにPPTを使用し10分のプレゼン→コメントを受けて修正→9/7(金)に担当者へメールで送付→9/8(土)出発
	11:00-11:20	連絡事項
	11:20-12:35	機関①②③(各25分)
	12:35-13:35	ランチ休憩
	13:35-15:15	機関④⑤⑥⑦
	15:25-16:40	機関⑧⑨⑩
	16:40-17:00	ラップアップ
9月8日(土)－17日(月)		海外FS現地実習：議事録案は全員にシェアし、帰国までに確定版完成
9月20日(木)		個人所感メールにて担当教員へ提出

振り返り、他の参加者と情報共有することを行い、多様な視点があることを学習しました。

本FSは、単に国際機関を訪問し、話を聞くという受け身的な教育内容ではなく、担当教員が事前に各機関の担当者と打合せし、10名の学生が

いずれかの機関について責任を持つリーダーの役割を担い、各機関の専門家の前でプレゼンテーションを行う参加型教育を行いました。国際機関ではリーダーのプレゼンテーション後に、職員との質疑応答及び議論を行い、議事録は、原則として、副リーダーが英語で記録しました。

本FSの最大の成果は、各機関での意見交換の機会を通して、学生が抱いていた国際機関へのイメージ、例えば、「国際機関の職員は遠い存在」、「堅い雰囲気がある」を覆すきっかけとなったことです。そのことにより、遥か雲の上の存在と思われた国際機関が、「専門性を深化し、語学力を磨けば」、自らのキャリアデザインの一部となり得るのではないかと考え始めるなど、大きな進展がありました。事前学習の時点では、語学力に不安を有する参加者が多かったことも特徴です。しかし、現地学習では、回数を重ねるごとに、少しずつ質問することに慣れてきた様子が見て取れました。これを機に、英語で自己表現を適切にできなかった悔しさや様々な気付きが、語学力の鍛錬と今後の自主学習の原動力になることが期待されます。

8. 実習後はどうするのか？－振り返り－

GLOCOLでは、事後学習として報告書作成や報告会で振り返りを行うことを課しました。以下、スイス・フランスFSでも報告書作成、報告会を利用した振り返りを行いました。

報告書は現地で使用した毎日の「振り返りシート」を基に各学生が所感を記述しました。その後、参加学生に所感及び担当教員らによるグローバル人材育成についての論稿から構成するブックレットを作成しました。さらに、次年度のFSの説明会等で体験談を話してもらうことも、振り返りの重要な機会でした。他者に自分の経験や気付きを的確に伝えるためにはさらなる思案が必要であり、それが非常に学びの良い効果となったと考えられます。

また、スイス・フランスFSでは、現地実習の1ヵ月後に日本国内でのフォローアップ活動も行いました。欧州評議会の多文化共生課長が来日する機会を捉え、同プログラムに参加した大学院生10名中の希望者4名と担当教員が、2012年10月25-26日「日韓欧多文化共生都市サミット浜松2012」に参加し、ストラスブールでお世話になった欧州評議会の多文化共生課長と再会しました。現地実習で高まった知的好奇心をどのように継続させて行くかは、全てのプログラムにおいて重要であり、体験を一過性のものとしない仕組み作りが求められていると言えるでしょう。